

第2回滋賀県総合教育会議 会議録

1 日時

平成29年7月25日（火）13:30～15:30

2 場所

大津合同庁舎7-C会議室

3 出席者

三日月知事、青木教育長、藤田委員、河上委員、佐藤委員、土井委員、岡崎委員

滋賀大学教職大学院 村田 耕一 准教授、畑 稔彦 准教授

県立守山中学・高等学校 吉澤 加寿子 校長

ヴォーリズ学園近江兄弟社高等学校 藤澤 俊樹 校長

【事務局】西川健康医療福祉部理事、河瀬教育次長、岩谷教育次長、猪田管理監、佐敷総合教育センター所長、山田教育総務課長、辻本教職員課長、板倉健康福利室長、檀原高校教育課長、西嶋幼小中教育課長、奥村生徒指導・いじめ対策支援室長、首藤人権教育課長、森特別支援教育課長、大西生涯学習課長、湯木保健体育課長、久保田私学・大学振興課長

4 子どもたちの学びをつなぐ取組について

学年間の学びの接続と教科間連携

青木教育長

本日はお忙しい中、ご参加いただきましてありがとうございます。それでは定刻になりましたのでただいまから第2回総合教育会議を開催させていただきます。本日はお手元の次第にありますとおり「一人ひとりの子どもたちの学びをつなぐ取組について」をテーマに議論をしていきたいと思っております。前半は「学年間の学びの接続と教科間連携」について、後半につきましては「校種間の系統だった接続」について議論をしたいと考えております。それぞれ1時間程度を考えております。

なお、本日は滋賀大学教職大学院より村田 耕一准教授、畑 稔彦准教授、県立守山中学・高等学校より吉澤 加寿子校長先生、そして近江兄弟社高等学校より藤澤 俊樹校長先生にお越しいただいております。それでは早速ですが、開会にあたりまして知事より一言ご挨拶をお願いします。

三日月知事

皆様こんにちは。本日は暑い中、そしてそれぞれお忙しい中、諸先生方にはお時間を頂戴しましてありがとうございます。常日頃、子どもたちの教育、また生涯学習や文化発展のためにご尽力いただいていることに敬意を表し、感謝申し上げます。今年度の総合教育会議は、次期大綱の策定に向けて議論することとしております。具体的には、系統的な教育の充実、特別支援教育の推進、滋賀の地域性を生かした教育を作りたい、そして学校と家庭、地域との連携という主にこの4つの観点から順次、今年度の総合教育会議で議論していきたいと考えております。今日はその中の系統的な教育というところで、諸先生方からご助言、ご示唆をいただければと考えております。

多くは申し上げませんが、夏には子どもたちが伸びるんですかね。私は学校で教壇に立ったことはありませんが、文化部は様々な発表の機会があるようですし、体育部も上の大会を目指して頑張る子どもたちや、それぞれ家や地域にいる子どもたちも2学期をどうしようか、わからないところをわかるようになりたいということいろいろと努力をします。地域のお祭りもあって、大人になりたい、この人おもしろ

ろいなといった学ぶことの多い機会だと聞いております。子どもたちの安全を祈りながら、来年度の施策や予算につなげていくような検討の場にしようと呼びかけた前回の会議の最後に申し上げました。そのあたりもゲストスピーカーの先生方には意識いただき、忌憚なくご意見をいただければと思います。

また、私も藤田委員もバッジを付けさせていただいておりますが、SDGsということで「誰一人取り残さない」という国連の17の目標に滋賀県が自治体として参画することを表明いたしました。その中では質の高い教育をはじめ、貧困や飢餓をなくそう、誰一人取り残すことなく福祉や教育を充実させていこうということも重要な取り組み項目として入っております。そういう視点からも、滋賀の教育の充実のために一緒に頑張っていきたいと思っております。そのことをお誓い申し上げ、簡単ではございますが挨拶とさせていただきます。

青木教育長

ありがとうございます。なお、今回はこの後ろの横断幕と皆様のネームプレートは甲西高校書道部のみなさんに書いていただきました。またこの機会をご活用いただけるようなことがあれば、お伝えいただければと思います。

それでは早速ですが、議事に入りたいと思っております。先ほども申し上げましたとおり前半は学年間の学びの接続と教科間連携について意見交換をしたいと思っております。まず初めに事務局から説明をお願いします。

幼小中教育課長

お手元の資料1をご覧ください。まず、学年間や校種間の課題の所在を明らかにするために、算数と数学の正答状況についてのグラフをお示します。小学校と中学校では出題問題数に違いがありますが、平均正答数以下の割合を比べてみました。小学校では、全体の34.8%が平均正答数以下であることが分かります。続いて、次のスライドにございます中学校の正答数に関するグラフをご覧ください。中学校では、全体の44.0パーセントが平均正答数より低いことが分かります。つまり、学年が上がるにつれて、いわゆる「勉強が分からない」と考える子どもが増えていくことを示しています。ならば、この状況がどうして生まれるのか、このことについて、順に、子どもの学びの様子をもとに説明します。まず、学年間の学びの接続について

ですが、

小学校の算数科での課題として、割り算の意味理解が充分でないことが課題として考えられます。割り算は、小学校3年生で初めて学習します。

小学校3年生では、「ある数量がもう一方の数量のいくつ分であるか」ということ。例をあげますと、12個のあめを1人に3個ずつ分けると何人に分けられるかということで、例にもありますとおり12個のあめを3人に同じ数ずつ分けるいくつに分けられるかということ学習します。その際、算数ブロックなどの具体物を使って操作したり、線分図などで大きさを表したりする活動を通して、わり算の意味をつかませる活動をしております。小学校4年生では、それに加えて「もとにする量」と「比べる量」から「倍」を求めたり、「比べる量」と「倍」から、もとにする量を求める場合についても割り算が活用できるようにしています。平成20年度の4番の問題の(1)は、4年生の問題、(2)は5年生の問題なのですが、お示したように、正答率は約3割低下しております。吹き出しのように、子どもの考え方が、4年生で学んだ割り算の意味を5年生で広げていくことが十分でないため、1より小さい小数倍や分数倍が出てくるところでつまづく児童が多いのが現状として見えてまいります。平成24年度にも、同様に小数倍する問題が出題されました。

次に、教科間の連携での課題について、お示しします。思考力・判断力・表現力等を育成するには、教科等の枠を超えた、横断的・総合的な学習課題について、各教科等で身に付けた知識や技能を活用して、相互に関連付けながら解決するという探究的な学習活動が大切です。このことについては、各教科が他教科との関連を意識した学習を行うこともありますが、多くは、「総合的な学習の時間」での学習が中心となります。例えば、小学校では、多くの学校で、5年生のフローティングスクールを中心としながら、環境学習の計画が組まれ実施されています。フローティングスクールの前後では、琵琶湖という教材をもとに、社会科や理科などでも学習内容として学び、フローティングスクールでの体験からの学びを充実させています。

シート1のグラフは、全国学力・学習状況調査の「総合的な学習の時間」のものでございます。自分で課題を立てて情報を集め整理して、

調べたことを発表するなどの学習活動に取り組んでいますかという児童生徒質問項目において肯定的な回答した割合の本県と全国との差の推移を示したものです。小学校は年々、改善傾向にあります。中学校は低迷しているのがわかります。

この原因の1つとして、教科担任制である中学校では、教科等の枠を超えた横断的・総合的な学習が十分に機能していない現状が考えられます。

シート2をご覧ください。また、平成28年度学校質問紙調査での、「カリキュラムマネジメント」に関する質問では、小学校に比べ、中学校が取り組めていない現状が見られます。新しい学習指導要領では、資質・能力をはぐくむために、教科等の枠を超えた横断的・総合的な課題について、一層の探究活動の充実を図ることが重要であることが、カリキュラムマネジメントとして示されていることから、教科間の連携をさらに強化していくことが必要です。

次に高校段階における教科間連携について高校教育課よりご説明いたします。

高校教育課長

スライドで申し上げますと9番になります。高等学校における教科・科目間の連携についてでございますが、専門の学科やコースを設置している高等学校では、専門教育の目標に基づいて、また、学科の特色等に応じて独自の学校設定科目も設けることができることから、教育課程は教科の多様な組合せとなっており、教科間で連携を十分に行うことは容易ではない状況であります。

次にカリキュラムマネジメントの推進についてですが、今年度中に告示が予定されている高等学校次期学習指導要領の趣旨に基づき、各校が目指す生徒像をしっかりと描きながら、教科横断的な視点に立って、カリキュラムマネジメントを進めていく必要があります。

最後に、新学習指導要領を見据えた連携の推進についてです。各学校では、各教科の主任が集まって教育課程の編成について話し合う会議や、学年の教科担当者が集まって授業の進捗度や生徒の到達度を情報交換する会議も設けられたりしておりますが、そのような仕組みをより充実させていくことが重要であると考えております。説明は以上です。

青木教育長

ありがとうございました。いま現状と課題ということで説明がありました。ここで、村田准教授、畑准教授より現場の取組について御助言等をいただければと思います。よろしく申し上げます。

村田准教授

教職大学院におりまして、今日はいろんな話をすればよいということで聞いてはおりますので、現場でどのようなことを思っていたかということ踏まえてお話をしたいと思います。小学校でずっと勤めておりましたので、学年間の連携について御紹介をさせていただこうと思います。課題と取組の事例ということでお話をいたします。課題としましては、小学校は教科担任制ではなく学級の担任がおります。高学年になった際に理科等を専門に教えている先生がいらっしゃいますが、担任の先生がずっとついていう現状があります。それによりまして、朝の8時から夜の4時ごろまでずっと一緒にいる。それこそ、給食、掃除、クラスの催しも全部一緒に付き合うという形になりますので、それぞれの条件に応じた学習の丁寧な指導ができるのかなと思っております。このことで子どもと大人の関係形成をしたり、子どもとの関係の微妙な変化を感じ取りながらやっている状況であります。ただ課題としましては、6年間という長いスパンで子どもを育てていくということになります。持っている学年は1学年なのですが、6年間という長いスパンを全教科系統的に教えていかななくてはいけないというところが大きな課題になるかと考えております。子どもの成長は著しいですので、そこに合わせた指導が必要になってくると思います。具体例を言いますと、1年生はひらがなをやっと覚えて使いこなしている状況なんですけど、6年生の終わりごろには短歌を詠んだり、調査研究の報告書を書いたりするところまで伸ばします。そこをいかに系統的に教えていくかということはものすごく難しいものがあります。先生方がその学年でどこまで教えていかななくてはならないのか、どこまで伸ばしていかななくてはいけないのかということを感じながらやる必要があるという課題もあります。また、1年生との関わり方を6年生にしてしまうと距離を置かれてしまったりもするのでそれも学年間で異なるところです。6年生を担当していた先生方が1年生の担任になったときには慣れるのに時間がかかるということも起こっています。併せて学習ノートのとまとめ方とかグループでの話し合い等を学校

ではしているものの担任によって大きくやり方が変わるという事もあります。学年が変わると学習の仕方が大きく変わってしまうということで子どもたちに戸惑いを起こすという傾向も見られます。そこを受けて現状はどうかというところですが、小学校においては校内研究が盛んになってきています。県の方からも授業改善をということで言われておるため、各校でも校内研究が盛んにおこなわれておりますし、併せて学年を超えたグループで指導案を作ったりだとか、授業が終わった後に担任の先生や教務の先生等が入り混じったところで授業がどうだったかといった研究をしたりしております。高学年になったときにこの力がついていないとなったときに、中学年のときのあの指導はどうだったのかという形で振り返っているという事例も出てきています。学習方法については、バラバラになっているものを何とかしようということで、市町で共通しているのが「め・じ・と・ま・ふ」ということをしております。「め」が「目当て」、「じ」が「自分で学び」、「と」が「友達と一緒に解決し」、「ま」が「まとめて」、「ふ」で「振り返る」ということで、市町共通して取り組むということになっております。小中でも取り組まれているところはたくさんあります。そこで終わっているところもあれば、学校のほうで市町教委の取組を引き受けて、学習のプロセスやゴールイメージをもとに主体的に進められるようにしているところも出てきています。総合的な学習のお話を最後にさせていただきます。これは国語で研究をされている学校ですが、御礼の手紙を書くという学習についてです。ただ単に手紙を書くという学習ではなく、総合的な学習の時間に地域の方に蓮の花の育て方をどうしたらうまく育てられるかを教えていただいたことから、子どもたちの手紙を書きたいという想いが強く出てきたためどういうふうに御礼を書くべきなのかということを取り組む学校があります。これは体験したことと文字をどのように繋げていくかということで、このことは大きくはなりませんが体験と言葉を互換しあうという効果的な指導になるので、カリキュラムマネジメントにもつながるものです。二つのことが一回でできるので働き方改革の一貫としても考えられますし、そのような側面も考えていけるような取組であります。以上です。

畑 准 教 授

続きます。わたくし畑の方から教科間連携についてお話をさせていただきます。私は昨年度まで公立中学の教頭として、2年間務めさせていただきました。その前は、隣におられる村田先生と教育行政の方で仕事をさせていただいております。主に2年間現場に戻らせていただいて、感じたことを中心にお話させていただこうと思います。教科間の連携についてということですが、小学校は学級担任制、中学校は教科ごとの選任の先生がおります。教科の専門性を生かしてそれぞれが授業を行っております。ですので、例えば数学でしたらこの数はマイナスを覚えることで世界が広がります。そういった形で教科としての学びを深めていくということが言えるかと思います。その一方で、私は数学の教師ですので、自分の教科のことはわかるのですが、理科がこの時期にどんなことを勉強しているかというところまでなかなか目がいかなかったというのが正直なところです。教科間の連携と言われると、そのあたりを大切にしていけないといけないのですが、そこを發揮する場としては総合的な学習の時間です。事務局資料の中では中学校がかなり低迷しているということで、私も現場に戻らせていただいて総合的な学習の時間の中で振り返りが必要だということを感じておりました。そのことを最初に具体的にお話させていただこうと思います。子どもたちの活動の中で自分たちの考えを活用する機会をちゃんと設けられていたかということを考える上で、中学2年生が職場体験をするのですが、子どもたちはいろんなことを学んできます。それを学年の発表会で終わらせるのではなくて、他学年の特に1年生を対象に自分の学んできたことを発表するという機会を設けました。そのことで、やはり1年生は来年度のことを考えますし、2年生は引き手を意識した話し方で程よい緊張感を持って話ができただかなと思います。また、学習内容の見直しでは三年間系統立ててということがございました。私のいたところは町でしたので、住民としての基礎意識を育成しようということを出しました。1年生では故郷滋賀のことを町にある小中学校と交流することで意識を深める。2年生では、地域での職場体験を充実させていくことで、出口を中学生議会の質問における企画提案まで持っていくことにしました。例えば中学生議会で町役場各課の仕事はどんなことをしているのかということ調べる子も出てきます。そうすると、この仕事は自分たちの生活のこういう

ところに繋がっているんだなということを知ることができます。あるいは自分の町と、他の市町を比べてみるとこんな良さがあるんだな。自分の町は教育を手厚くしてくれているのだなということを理解することは、町民の願いでもあるのかなと感じております。子どもたちは自分たちの活動で何かを変えられたということは、最後には地球規模のことを変えていけるような話になると思います。そういった意味で総合的な学習を活用してまいりました。

青木教育長

ありがとうございました。ただいま事務局からの説明と村田先生、畑先生からのお話にもありました通り、前回に系統的な教育についてお話をさせていただきたいと申し上げましたが、系統的というところでも小から中、中から高といった校種間の連携が頭に出てきますが、やはり学校内での学年間、そして教科間の系統性というところも重要になってくるであろうということで前半にこのテーマをセットさせていただきました。そうした意味で今回も様々な御意見をいただければと思いますので、よろしくお願いします。

藤田委員

両先生、ありがとうございました。現場のお知恵をいただきまして、連携というのは非常に大切なことであると思います。この間全国の教育委員協議会に出席させていただいて、そこでも非常に大きなテーマとなっております。教育をするうえでは、子どもたちを育てるユニバーサルデザインという考えもありまして、知識がずっと続いていくかどうかというところと、心のことも重要でそこが上手く回っていけばいい教育のマネジメントができていくということになると思います。幼から高校までのマネジメントが社会に繋がっているという意識が必要です。併せて心のマネジメントもしっかりやっていくべきです。いま感じたことだけですが、これから出てくるご意見も伺いつつうまくこのマネジメントを回せるようにしたいですね。

土井委員

カリキュラムマネジメントの問題や学年間・教科間連携の問題がなぜ議論されるかということですが、一つは教科に限らない様々な教育の必要が現在言われていることがあります。主権者教育や、滋賀が率先して行っている環境教育もそうですが、「環境教育」「主権者

教育」という科目があるわけではないのです。こういった学習を教育課程に取り込もうとしますと、総合的な学習の時間に吸収するか、関連する教科、科目で連携して取り込んでいく必要があると思います。環境問題を理科でやる場合には自然科学的側面があって、環境の問題をどのように解決していくのかということになると社会科に近い面があります。そうした問題をバラバラにやるのではなく、どのように連携してやっていくのかを検討するために、カリキュラムマネジメントが言われているのだらうと思います。そうしないと、教育としても効果的ではありませんし、学習量が増えていく一方ということになります。したがって、整理するところは整理をしてしていく必要があります。

もう一つは環境教育もそうなのですが、課題解決型の学習を取り入れていかななくてはならないことに関します。そのためには、先ほど町役場の担当課の話が出ましたけれども、課題は担当課を決めて出てくるわけではありません。課題は分野を限らずに発生するわけですから、当然課題解決をするためにはいろんな知識を働かせて考える必要がありますので、最初からこれは数学でやりましょう、あなたの課題は英語の問題ですと分けられません。その意味では、一定の課題を中心に教育課程を編成しようと思うと教科間・学年間の連携を図っていく必要があります。これが二つ目の大きなポイントです。

そして三つ目は、教育課程全体が知識中心から思考力や判断力、表現力、分析力を付ける方向に動いています。思考力、判断力あるいは表現力は、教科間でそれほど大きな違いがあるわけではなく、どの教科でも学ばなければなりません。その典型例が、全国学力・学習調査の数学 B の問題です。基本的には長い文章を読ませて、その文章を理解して問題を分析させて最後に計算を行うという問題になっています。この場合、問題文を読んで理解するところは、本来、数学の問題なのか国語の問題なのか、あるいは他の教科の話なのかは判然としなないのです。こういう形で総合的に学力を見ていこうという方向に動いていますので、教科、科目の連携が必要になってきています。

さらに、高校の場合には、これらに加えて、各学校の特色がありますので、どの程度の水準の学習をさせるのか、どういうところにウェイトを置いて学習をするのかは、各高校の生徒さんの関心に合わせて

できるだけカリキュラムに可塑性を持たそうという方向に動いていくと思います。その意味では全部の高校で一斉に同じことを学ぶのではなくて、生徒に合わせた形で教育を行う、そのためには学校でそれを見通すためにカリキュラムマネジメントが重要になると思います。その意味では、県としても十分取り組んでいかなくてはいけないことと思います。

藤田委員

いまおっしゃったようなことで、先日の協議会でも人工知能を開発されている責任者の方のお話の中で、学力が伸びないというのは読めないということでもあると言われていました。問題を読み切れていないので知識として入ってこないという話でした。最近の人は考えるということをせず、調べるということを先にするように思います。調べるということが考えることとすり替わっているのではないのでしょうか。

村田准教授

よく子どもたちともしゃべるのですが、読むということについて字面は読めているんですけども、その意味がわからないと言うんです。何を意味しているのかとか、もう少しいうとその文章の目的等を読むという事が、小学校段階からまだそこは弱いなという印象です。それと藤田委員がおっしゃられたように、情報を取り込むということは力が付いてきているような感じなのですが、それを取り込んだあと自分で考えて外に出すところがまだまだ苦手で、出すときの方法ではなく出す目的のためにどのように自分で考えを高めていくのかという学びをこれからやっていかないと自分の考えや想いというのが出てこないということになります。

岡崎委員

わが子を見ていても思うのですが、確かに読んでないなと思います。考えるということと言うと、親子の会話でもそうですが、その子がどんな思いを持っているか、考える場面が常日頃あるかないかというところで違いがあると思います。例えば豪雨のニュースについてどう思うか聞いても、その自然科学的な現象のことに理解がないと考えるところまでいかないと思います。昔のカリキュラムと今のカリキュラムがどう違うかはわかりませんが、同じ知識を教えてそれを効果的に活

用するための総合的な学習の時間が設定された時も、何の教科を教えるのかと疑問に思いました。どういう学習をするかというのが保護者にも十分伝わっていないので、親としてもどう関わっていけばいいのかわからないということになります。そんなことを今の御意見を聞いていて思い返しました。会社でもそうですが、それぞれにミッションがあって、そこに対してどうしたいという意味がやっぱり少し弱いのかなと感じています。右から左に受け流すのみではなく、お客さんのためにどうするのかというところにまで考えがいたっているかということでもあります。難しいことですが考える力というのは必要であると思います。

三日月知事

伺いたいのですが、総合的な学習の時間は体験を言葉にするであるとか、体験を発表に変えるというようなことで、学びやすく、学んだことを確かめやすい時間だと思います。先ほど事務局から説明いただいた資料1にあります質問紙の「自分で課題を見つけ調べた学習活動に取り組んでいますか」というところでは、小学校は改善傾向にあるが、中学校はそうでないところが大きい。加えて、これは総合的な学習の時間の話ではないのかもしれませんが、その下の「教科間の相互関連がわかるように教育課程表を作っていますか」というところで、小学校は作っているところもありますが全国平均よりも低い状況です。中学校になるとさらに全国平均よりも下がってしまいます。このあたりが一つ、改善の方向性じゃないのかと思うんですけどいかがですか。

ちなみに総合的な学習は3年間でここまでというのは決めてやるものなのですか。1年生、2年生、3年生それぞれでやっているのではなく、校内全体でやっているのですか。

畑 准 教 授

校内全体計画というものがあり、各学年のステージで決めていきます。今度の新学習指導要領では、統計的なものの考え方が大事になるので、小学校の段階からデータの活用や平均値等を学び、一年生では平均値が万能ではないということも学びます。そして六年生では最近値や中央値等といったことを学び、中学校では箱いれ図も学びます。総合的な学習の中で位置づけられています。問題の所在を明らかにす

るためにまずはアンケート等のデータを収集してみます。それを整理して、どんな傾向があるのか、とらえたうえでどんな特徴的なことがあるのかということを考える。学力調査の問題が例にあがりましたが、今年の数学Bの最後の問題は解決型のものになっておりまして、体育委員の子が体力向上を目指したいという問題意識を持ってうごくという大きな問題です。体育委員に週何時間運動していますかというアンケートを取りました。そうすると、1日に60分以上運動している人とほとんどしていない人で体力テストで二つ山ができそうだということ根拠に、最後の授業の出口として体育委員としてみんなにどんな体力向上を訴えていきますかという問題解決になります。そういう問題解決についてが問題の中にもありますので、そこを総合的な学習の時間の中で数学の力をつかっていけるのかなと感じております。

三日月知事

そういう課題解決的な学びをする指導が滋賀県の中学校ではできていないのではないですか。この資料の下の数字を見る限り、全国に比べて子どもたちにどう教科間をつないで教えればいいのかという計画が立てられていなかったり、教科課程表が作れていないのではないですか。まずはここからやってみてはどうでしょうか。

畑 准 教 授

質の問題だとは思いますが、まったく計画等がないままやっているとは思いませんが、ご指摘の通り見直すことは大切です。

岡 崎 委 員

資料1のグラフでは平成25年度から平成26年度は伸びていますよね。平成26年度の子どもたちが小6だとすれば、中学に行くところ下がってしまうということになるのですか。

藤 田 委 員

ここは教えていただきたいところなのですが、ある種カリキュラマネジメントの入り口から出口のデザインはできていると思うんです。まず、中学でここまで学ぶには、小学校でここまでやってほしいということを伝えていく必要があると思います。いま岡崎委員が言われたように、小学校でデータの的には上がっておいて、中学の入り口で下がってしまうというのはそのマネジメントが上手く回らないということが起こりやすいのでしょうか。小学校は学級担任制なの

で、得意なものも不得意なものも一人の先生がやりますよね。その後、中学で教科担任制となるのでそこが上手くかみ合っていないということなのでしょう。

畑 准 教 授 資料1にあります総合的な学習の数値が物語るのは、その点において中学は関連付けが弱いということになります。

土 井 委 員 例えば、主権者教育をするとします。小学校の先生であれば、学級担任制なので自分がそれをする必要があると感じます。ところが中高になると、まずどの教科にそれを割り振るのかという話になります。そこで、公民の先生が扱うとすると、選挙制度について教えようかという発想の授業になります。しかし、主権者教育としては、この地域は洪水が多く、どういう対策を取っていけばよいのかが選挙の争点になったりします。そうすると、そういうことを考えることができる知識が必要なんです。そうすると社会科の先生だけでは教えることができません。土壌がどうなっているのか、気象がどうなっているのかという理科的なことを考えないと政策の判断ができないわけです。そういう意味でいまカリキュラムマネジメントが大切なわけです。畑先生がおっしゃったように数学の観点から統計的な考え方を学ぶ必要など教科横断的になっていくはずなんです。なかなか先生方もお忙しく、新しいことがでてくると他に振りがちです。そこをカリキュラムマネジメントに基づいて教科横断で、それぞれ協力してやっていかないと本当の課題解決にはならないだろうと思います。総合的な学習の時間は、それが一番しやすいでしょう。

村 田 准 教 授 小学校の教員も年間の指導計画で進めていくのですが、課題がでてくると全教科教えているので、たとえば「書く力」「話す力」というのは国語や社会の時間に使えるなといったことをマネジメントしながら進めているところがあります。決まっているものをそのまま流していくのではなく、やりながらどんどん修正をかけながら一年間を終えます。そういう意味で小学校はマネジメントがやりやすく、総合的な学習の中で子どもたちにどんな力をつけさせたいと思った時に個の教科で一回触れておけば子どもたちも振り返ることができるなというこ

ともできます。学習の指針でも示してありますが、目標をみつけ見直しをもってやれていますかと各学校に聞いたりもしますが、やはり小学校は一つの教科でそういった学習のしかたを確立すれば、他の教科にも波及しやすいという側面はあると思います。

土井委員 中学校や高校でそれをやっていくためにも、「チーム学校」を考える必要があります。新しい取組みをするときには、やはり中心になる先生がいるのは確かなんです。みんなの責任にして、結局、みんなが無責任になってしまうのもよくありません。そこで、例えば、主権者教育を公民の先生が主になってやろうとするのであれば、他の先生方がしっかりチームになってやろうということにならないといけない。ここがおそらく、教科の在り方や学校運営のやり方で難しいところです。各先生からみれば、自分の所掌範囲のことで他の先生に迷惑をかけたくないということなど、いろんな事情があるんだと思います。しかし、新しい問題や課題について、チームで動けるような学校づくりをやらなければ、中高での教育改善は難しいと思います。

藤田委員 これは小学校であれば、先生一人ひとりの力量で決まるところもあります。中高になると教科担任制なので整合性をとる力の問題にもなってくるように感じました。

青木教育長 まだまだご意見をいただきたいところですが、次の議題の中でもいまの議論が出てくることと思いますので、校種間の接続について意見交換を行いたいと思います。

5 校種間の系統だった接続について

青木教育長

それでは事務局より資料の説明をお願いいたします。

幼小中教育課長

まず、幼稚園、保育所等と小学校の生活の違いを表にまとめてみました。幼稚園、保育所等の生活では、子ども本人の意欲や関心が大切にされ、また、やりたいことを十分にやりきる環境があります。それに対して、教師が教える、子どもにとっては各教科の学習内容を系統的に学ぶことになる小学校では、幼稚園、保育所等で育まれた資質・能力をうまく引き継ぐことができていない状況が見られます。

環境の変化や個人差から、学び中心の生活になじめない子どもがいたり、環境が変わることで、個人差はありますが学校生活に辛さを感じる子どももいます。

小学校に入学直後、遊びから学びに生活の中心が変わり、幼児教育から小学校教育へ指導が一変する段差を乗り越えられなかったり、自分をコントロールする力が身につけていなかったりすることで、集団行動がとれない、教師の話がしっかり聞けない、指示に従えないなどの状態に陥る子どもがいるのが現状でございます。こうした不適応状態が継続し、クラス全体の授業が成立しないという場面も見られます。

幼稚園、保育所等では頼りになる最年長の子どもたちが、小学校に入った途端にかわいい1年生として扱われます。小学校に入学する前の幼稚園、保育所等では、年長児は頼りになるお兄さん・お姉さんとして園生活を送り、年少児のあこがれの存在でもあります。そんな年長児が、卒園し小学校へ入学した途端に、何もできないかわいい1年生として見られ、必要以上に低く見られることがあります。生活のきまりなどを学ぶ中で、既に生活の決まりなどを身に着け、小学校での学習を楽しみにしている子どもたちにとってはやや停滞した時間を過ごすことにもなります。また、保幼小の子ども同士の交流は出来ていますが、教員同士の連携がなかなか出来ておりません。時間割などの関係から、互いに保育や授業を見合うことが難しい状況もあります。このようなことから課題といたしましては子どもの生活をつなぐこと

ができていないことであり、園の生活を知り、入学当初の生活がゆるやかにシフトしていけるように仕組みを作っていくことが重要です。このためには子どもの入学時のやる気をつぶさないための、生活科を中心としたスタートカリキュラムの作成等が必要となってきます。

さらに小学校教師が幼稚園、保育所等の実際の様子をもっと知ることが大切であり、幼稚園では5・5交流などを通して小学校での活動を年長児に体験させるなど、入学前から互いにつながりを作ることとしております。しかし、保幼小それぞれの活動と取組を見合う機会をつくられておりませんので、教師同士が、具体的な場面を見ることで子どもたちの捉え方の違いや何を学んできたのかを明確にし、今後は対応策を考えていく必要があると考えております。また、幼稚園・保育所側は、幼児教育における「育ってほしい姿」が小学校教育の何にどうつながっているのかを知るべきであるということが課題としてあります。小学校側は、幼稚園、保育所等で、どんな活動や支援を通して、育てているのかという具体を知る必要があり、このような交流を通して、具体的なつながりを見出すことが大切であります。

続いてその下の小中の学びの接続についてでございます。こちらも全国学力・学習状況調査についてお示ししたものでございます。平成25年度の小学生の学力調査の結果が左でございまして、算数Aの大問3についてです。その右は平成28年度の中学生の学力調査についてでございます。こちらは数学Aの大問2でありまして、同じ問題が小学校と中学校で出題をされております。平成25年度の小学6年生が平成28年の中学3年生であり、同じ子どもが対象となっております。同じ数を3で割ったら商が9であまり2でしたという問題ですが小学校の問題を見ますと答えが9という数字だったものが中学生になるとaという文字に代わります。そうなったときに小学校の時は正答率が69.2%だったものが、中学生になると39.4%と大きく下がっております。その下の無答率については、小学校では2.8%だったものが13.3%と上がっております。現在、中学校におきましては文字を扱う前に箱を用いて小学校を振り返ることもします。割る数×商という関係

をとらえ、文字であらわす活動がさらに必要となることが言えます。
次に高校教育課より中高の接続について御説明いたします。

高校教育課長

スライドは 15 番になります。中高接続の課題につきまして、まず、全県一区の中で普通科、専門学科、総合学科など多様な特色を持つ高等学校から、中学生が自分の資質や適性、興味関心を持った学校を選べるという事が大切であります。高等学校においては、それぞれ特色ある学校づくりを進めていますが、その魅力について中学生やその保護者に対して発信し、丁寧に説明していく必要がございます。高等学校入学後は、生徒一人ひとりにおける中学校までの学習の積み重ねの状況は多様であることから、入学後に早い段階で個々の特性を把握し、一人ひとりに目を向けた教育活動を進めることが重要であります。

学習指導要領が改訂されるこの機会に、高校の教員は、入学してきた生徒が中学校でどのような内容を、どのような方法で学習しているか、また、中学校の教員の方も、生徒が高校でどのように学びを進めているのか、今後は互いの教育活動について、さらに理解を深める必要がございます。

次に、中高の接続の対応状況についてご説明いたします。中学校においては、生徒の興味、関心、能力、適性に応じて丁寧に進路指導がなされ、高校の選択に至っております。高等学校からは、具体的な取り組みとして中学生に向けて、ホームページや学校案内のパンフレット等を作成し、積極的に情報を提供しているほか中学校主催の説明会にも出かけて学校の特色をお伝えしております。また、夏休みを中心に、各高校で中学生一日体験入学を実施しており、延べ人数で生徒 3 万人、保護者 1 万 5 千人程度の参加があります。中学校においては、例えば普通科と専門学科の両方の体験入学に参加し、進路選択するように指導しているケース等もございます。

また、生徒が高校に入学してからの個々の状況把握につきましては、入学後の学習状況や個別面談などを通して、生徒の学力や特性、進路希望などの状況を把握し、授業形態の工夫や個別指導計画等、様々な

取り組みを行っております。必要に応じて個別の教育支援計画等の引継ぎも行っております。学校によりましては、中学から高校への円滑な接続を図るために、生徒の基礎学力の定着を目指して一年生において例えば「高校国語の基礎」「高校数学の基礎」「高校英語の基礎」といった中学の復習を含めたような学校設定科目を設けているところもございます。また、クラスを分割し、少人数で学べるようにしている学校もございます。

また、中高の組織的な連携というところでは、例えば学習指導要領で小中高が連携して英語教育を研究するというところもございます。それでは最後の点ですが、本県には中高一貫校が3校ございます。河瀬、守山、水口東とあるなかで、6年間の継続性を考えながら中高一貫教育を行っております。本日は、県立守山中学・高等学校から吉澤校長先生に来ていただいておりますので、具体の説明をお願いしたいと思います。

吉澤校長

失礼いたします。県立守山中学・高等学校校長の吉澤です。本日は中高一貫校の取組について御報告させていただきます。まず、資料の1番にございます本校の概要についてです。県立守山高校は全日制普通科として昭和38年4月に開校し、今年で55年目になります。平成15年4月には併設型の中高一貫校として中学校が併設されました。中高一貫教育制度の導入により、ゆとりのある学校生活の中で、生徒の個性と創造性を伸ばす教育を実現させることや、学校制度としての中等教育の多様化や複線化を図り、児童生徒や保護者の学校選択の幅を広げることが期待されました。平成26年からはスーパーグローバルハイスクールとして文部科学省から5年間の指定を受け、将来、国際的に活躍できるグローバルリーダーを高校段階から育成するための質の高いカリキュラムの開発と実践に取り組んでいるところです。

次のページに参ります。本校の教育目標と教育方針については、ここにあるとおりです。定員についてですが、中学校は各学年80名で、計240名です。高校は内進の2学級を含めて各学年7学級で840名です。中高あわせまして1,080名です。

次の4番は、中高一貫の系統的な教育についてまとめているスライ

ドになります。6年間の教育を、表の中ほどにありますとおり、基礎期、充実期、発展期の3つの段階において中高の円滑な接続を図っております。中学校で特色ある学校設定教科を設定して、発展的な学習内容を高校の授業と関連付けて教育課程に位置付けております。その例としましては、表中の赤丸で示しているところになります。中学三年生では「ソーシャルスタディ」、中学をとおしましては「ディベート」、そして「サイエンス」というものが学校設定教科となります。このような学校設定教科での学びを高校の授業につなげております。特に総合学習の時間として行っております「人間探求学」は、高校の総合的な学習の時間「SGH 探求」につながっていきます。

5番ですが、中高の接続を特に意識した取組としてあげますと、下にあります8つが該当します。その中で主だったものについて説明をいたしますと1番の「守高授業体験」です。これは中3生対象に12月に英国数の高校教員が授業を行います。この時期に高校での授業のスピードや内容を体験して、高校の授業についてのイメージを生徒が持つことにより、高校への移行が円滑にできるようにと考えております。2番の部活動への参加についてです。中学校の部活動を夏に引退しますが、本校では夏に引退した後に、希望で高校の部活動に参加することができます。このような点は、高校入試がないことの利点でもあると考えます。一番下の「発展的な学習」については、中学の秋から冬に取り組んでいるものです。具体的には京都府立大学や金沢大学から大学の教授をお招きして、理科分野の実験や検証等を行います。深い学びによって生徒が将来について考えるきっかけになっていると思っております。

次に6番にまいります。このような中高の接続を意識した取組が高校におけるSGH活動のベースにもなっております。この表の左側は高校の総合的な学習の時間である「SGH 探求」で全生徒が取り組んでいるものです。ブルーで示しております部分はSGHの指定を受ける以前から本校で進路課がキャリア教育を中心に取り組んできたもので、高1のディベート、高2の課題研究、そして高3の卒業論文という流れで指導をしております。その流れに沿いまして、ピンクで示している部分がSGHとしての新たな取り組みが関連して加わっているものです。この表の右の方は、SGH 課題研究チームとあって、そのチームの

生徒が取り組んでいる主なものになります。この部分において特に内進生はリーダー的な存在として積極的に活躍しているように思われます。

つぎに7番目です。高校から入学してくる生徒の状況をどのように入学段階で把握しているかということについてですが、括弧1に示しているように業者のリサーチを4月当初に実施し、これを活用していきます。国数英の3教科について分野別に学習の定着状況や学力を把握します。それと同時に、学習に向かうスタイル、勉強の仕方であるとか生活スタイルの状況も把握します。この結果を活用しまして経年比較したり、内進生と高入生の状況を比較したりして、全体状況を把握して教科の指導に生かしていきます。

また、括弧の2にあります。生徒一人の指導にも活用してまいります。学力の分析も大切なのですが、学習習慣などの学習や生活スタイルの結果を個人面談で活用し、生徒自身にふりかえりを促し、高校生としての学校生活をどのようにすれば円滑にスタートできるかということに関しても面談で話をしていきます。括弧の3はどこでも行われていることで、中高一緒に研究授業を行っております。

8番は、中高の教員がどのように連携をしているかということですが、赤で示しております2番と3番について説明をさせていただきます。2番にありますように各教科における学年別の状況を共有して教科指導に生かしておりますし、特に入学段階で「高1内進生情報交換会」を行い、前年の高3の担当者と高1の担当者が引継ぎを行っております。このような会議をもつことは大切なことなわけけれども、中学校入学時から生徒や保護者のことをよく知ってくれている中学校の教員が、常に同じ職員室にいるということは、生徒にとっても高校の教員にとっても、何より頼りになることであると思っております。

つぎに9番で高入生と内進生がどのように相互に影響し合って高校生活をおくっているかということに関してですが、クラス編成においては高入生と内進生をミックスするということはありませんが、特に1番に書いてあります学校行事や2番の総合的な学習の時間である「SGH 課題研究」等を通して相互に影響し合っております。括弧1の学校行事を通してというところですが、入学の方法に違いがあっても、同じ守校生として切磋琢磨できる集団づくりに重きを置いて

学校の行事を位置付けております。特に入学時のオリエンテーションに力を入れて行っております。

入學段階では、守高文化になじんでいる内進生がイニシアティブを取っていますが、徐々に高入生が刺激をうけて成長していってくれます。その後、2年生の学園祭、修学旅行等を経て、集団の一員として学校行事を通して大きく成長していってくれるように思います。最終的に3年の学園祭では、3年生がリーダーシップを発揮して、本校のよき伝統を後輩に伝えるということになっております。総合的な学習の時間や「SGH 課題研究」の学習場面では、やはり課題を発見する意欲や力については内進生の中に秀でた生徒がおりますので、まわりの生徒たちに非常によい影響を与えて、相互に成長していっているように思います。

次のページになります。本校におきましても、今、まさに次期学習指導要領への対応と、持続可能な SGH 校としても4年目に入りますので、そのようなことも含めて本校の教育課程を検証し、中高一貫校としての特色を生かしたカリキュラムマネジメントを推し進める時期にあたります。「学びの変革」推進プロジェクトという県の事業を活用しまして、校内の研究授業等も活発になってまいりましたし、中高大、社会への円滑な接続、系統的なキャリア教育の在り方についても検討をする必要があることについては言うまでもありません。新たに大学入試制度も変わってまいりますので、その対応も視野に入れて、カリキュラム全体に落とし込んでいく必要があると思っております。

先ほどの話にも出ておりましたように、各教科の教員はその教科の専門的な指導に一生懸命で大変忙しくしておりますので、SGH などの特化した取組をいかに学校全体での教育活動として位置付けて、カリキュラムマネジメントを進めていくかということに関しましては、やはり校長等のリーダーシップが必要であろうと思います。先ほどのご指摘にもありましたように整合性を踏まえて考えていきたいと思いません。

最後の3つの言葉「信じる！育てる！支える！」は、守山中学・高等学校の教員の合言葉です。教員が一丸となって、「学びあい、支えあい、共に育つたくましい人づくり」と、「グローバルリーダーの育成」を一層進めてまいりたいと思いません。

青木教育長

ありがとうございます。続きまして近江兄弟社高校の藤澤校長先生よりご説明をいただきたいと思っております。よろしくお願いいたします。

藤澤校長

近江兄弟社高校の藤澤でございます。日頃、私学を気にかけいただきありがとうございます。本日も、このような機会をいただき大変ありがたく存じております。近年、ヴォーリズ精神を本気で引き継ごうとの決意で、ヴォーリズ学園と法人名を変更いたしまして、まだあまり馴染みはないかもしれません。生徒児童数は 2,448 名であり、幼稚園・保育園から高等学校までありますので、この場にお呼びいただいたのだと考えております。しかし、私からは一貫教育の失敗例についてお話をしなくてはならないと思っております。我が学園は一貫教育について、私学にしては珍しく「棚上げ」をし、また小学校については募集停止をいたしました。そういう意味では、一貫教育について大変、苦しみながら考えてきた学校でもあります。私は 38 年前に就職してからずっと近江兄弟社にありますが、まじめに一貫教育とは何かということを考えてまいりました。そういう点では、報告をする資格があるのかなとも考えております。

本学園は約 100 年前に幼児教育、少し遅れて中等教育をスタートさせました。そして戦後、幼稚園から高等学校までの総合学園となりましたが、スタート直後から、一貫教育は、すでに暗礁に乗り上げておりました。全国的に見ても、上に大学があり、全員が上がっていくようなところでないと一貫教育は成功していないように思います。そして、そんな私学でも、一貫教育とは何なのかという疑問には案外答えを持っていないように思います。他府県の小中高を擁するかなり有名な学校から我々のところに研修に来られることもありますが、そんな学校でも一貫教育とは何かという答えを持っておられません。本学は今春、小学校から中学校については、36 名中 24 名が進学し、中学校から高校については、171 名のうち 96 名が進学し、約半分が内部進学するという状況であります。この内部進学率をいかに上げるかということを経営 30 数年間、模索してまいりましたが、結果としては「棚上げ」を決意したところです。

私は一貫教育というのは功罪があると考えております。小学校の 6 年間と、中等教育の 6 年間は発達の仕方が違います。なので、その都

度、選択をするということのメリットも私はあると考えております。私が本学園中学生に言うのは、みなさんはきっちり進路選択をしてください。そして選んで近江兄弟社高校にきてくださいということです。一貫教育の一番の失敗例は戦前の軍隊教育であると考えます。幼年学校・士官学校から陸軍大学といった一貫教育が展開されましたが、その視野の狭さが、先の大戦につながっていきました。一貫教育は、やはり、視野が狭くなるということは否めないのではないかと考えます。私的なことにはなりますが、私の娘は兄弟社高校出身です。上の子は兄弟社中高出身。下の子は公立中学校から兄弟社高校に進学しました。下の子に聞きますと、中学から上がってきた子はこの子だとすぐにおかると言います。そのあと京都の附属中高がある大学に進学しましたが、やはり同じことを言っておりました。私が今までで「一貫教育」に関して一番ストンと納得できたのは、東京の私学の学園長の「下から上がってくる生徒は、うちの学園のことが好きな子です」という説明です。抽象的ではありますが、一貫教育とは、その「学校が好き」という気持ちを育む、そういうものかな、それが大事なのかなと思っておりました。

本校は現在、「一貫教育」を棚上げし、「連携教育」を推進しております。「連携教育」について3つの視点からお話をいたします。まず、大学との連携です。本校は12大学と包括的な連携協定を結んで様々な取り組みをしております。今は大学に行くために高校に行くというところはありますが、大学等に行っても、1割以上が退学をしているという現状で、年によっては2割近い時もあります。大学を卒業しても、就職も進学もできないという学生が年間10万人ほどいるということです。つまり、大学へ行ってミスマッチを起こさないということが大切だということです。先日も本校が協定を結んでいる、ある大学にPTAとして見学に伺い、その時に説明をされた大学の教授に「どんな学生が欲しいですか」という質問をしたところ、やはり「目の輝いた学生さんに来て欲しい」ということをおっしゃっておられました。目を輝かせて大学で学んで欲しいということです。つまり、高校で、「学ぶことが好きだ」といえる子を育てることが高大接続の一番大切なことではないかと思っております。

そして2つ目ですが、地域の学校、特に地域の中学校との連携につ

いてです。本校には単位制課程がございまして、中学校のときに不登校等を経験して苦勞をした生徒が多数入学をしてきます。ここでは、中学でほぼ全欠だった生徒がほぼ皆勤で大学に進学するという例も多く出てきております。本校のスクールソーシャルワーカーが過去の生徒を統計的に調べてくれたのですが、一つの結論としては中学で不登校でも、中学の先生と何らかの繋がりをもっていた生徒や「適応指導教室」等に通っていた生徒の回復率は非常に高いということです。いじめられた生徒もおりますので人間不信に陥った子もいるのですが、その中でも「人間が好き」という感情をどこかで育まれた子は環境が変わればしっかり成長していつてくれるということです。さきほどの「学校が好き」「学ぶことが好き」、そして今の「人間が好き」という感情を育むことを求めて、校種間がつながっていくべきかなと感じております。

3つ目は今回のテーマとは少し離れますが、地域との連携ということも挙げさせていただきます。地域のロータリークラブから支援を受けて、国際交流やボランティア活動を行っております。本校としては少子化等の課題はありますが、学校が元気であることが地域の活性化に繋がればと考えております。また、動きとして微々たるものですが、公立高校との連携も図ってまいりたいと考えております。近江八幡には元気で、さわやかな高校生がたくさんいるということが、地域創生に繋がればいいなと思います。

終わりになりますが、連携の軸は「学校が好き」「学園が好き」「学ぶことが好き」「人間が好き」、そういった生徒を育てることだと考えております。また、本学園中学校のパンフレットのキャッチフレーズは「こころざしが芽生える」で、高等学校は「こころざしを育む」です。中学で志を芽生えさせ、高校でその志を育むというつながりです。そして高校の学校目標は「ヴォーリズの生き方に学び、『地の塩・世の光』たる自分を自覚し（→自己肯定感を育み）、育んだ『こころざし』を胸に、一歩踏み出す」です。卒業するときには、育んだこころざしを胸に、さあ頑張るぞ」と次のステージに出て行って欲しいと思っています。そのための具体的な取り組みとしては、自主製作テキストを活用した、キャリア教育中心の総合学習「ヴォーリズアワー」があります。また宗教教育についても改革し、宗教・宗派にとらわれることなく、全て

の真摯な宗教の根底に流れているものを追求するような宗教教育、具体的には「いのちを大切にせる教育」を展開しています。そして国際人教育と合わせて「リベラルアーツ教育」を推進しております。以上です。

青木教育長

ありがとうございました。子どもは一人の人間なわけですが、学校段階が変わりますと幼から高へと制度上切れている部分があります。そこをどう繋いでいくのかという問題提起からスタートした課題でございます。それでは残りの時間でいただいたお話を踏まえまして、意見交換をさせていただきたいと思ひます。

藤田委員

先生、ありがとうございました。私学ならではだということだと思いますが、宗教教育をされる中で他の学校と違ふと感じられるところはありますか。

藤澤校長

この10年間、仏教、神社、カトリックも含めキリスト教まで様々な、それぞれの宗教の著名な方をお呼びして講演をしていただくという取組を毎年、実施してまいりました。共通するテーマは「命を大切にせる」ことでした。そういう点で言うと、自分や友達の命がかけがえのない尊いものという話をするのが、生徒たちに、なにがしかの影響を与えているのではないかと考えております。本校では聖書からとった「地の塩、地の光」という学園訓で、「自分はかけがえのないものなのだということ、そして自分のことは少し我慢をしても周りのために生きていくんだよ」ということを教えています。延暦寺学園では、「一隅を照らす」ということで、同じようなことが言われていると思ひます。そういった教育の結果、例えば本校の生徒は進路としても目に見えて人の役に立つ仕事を選ぶ生徒が多いように思ひます。

藤田委員

ものすごくいいことであると思ひます。先ほど申し上げた全国教育委員会の連合会における分科会で、道徳教育をどうするかというところでいろいろと意見交換をしました。戦後は知識とモノを追いかけてきたんですが、モノだけ追いかけると大切なことを忘れてきますので、それがもう一度道徳を見直そうという事だと思ひます。

先生からは先ほど、中学から他の高校に行く方もおられるというお話がありました。そこはどのようにお考えですか。

藤澤校長 先ほど申し上げましたように、小学校の6年間と中等教育の6年間は違うなというのが私の実感でございます。やはり、判断する力がついてきますよね。そうすると、この学校では物足りない等の判断する生徒も、残念ながらいます。大学への進学実績状況等もあるでしょう。そうした色々な事情で高校は公立に進むという子もおります。

藤田委員 ありがとうございます。守山中学・高等学校としては違う高校に進む生徒さんはおられるのでしょうか。

吉澤校長 ほとんどの生徒が守山高校の方へ進学いたします。

藤田委員 その辺が私学とは違うところなのかもしれないですね。

河上委員 先日、保幼小の連携の大変良い例を拝見させていただきました。瀬田南中学と幼稚園は一つの建物で学習をしているわけですが、そのすぐ近くに南小学校があります。ちょうど訪問させていただいたときに、年長さん、つまり今度小学校1年生になる子どもたちが小学校のプールで小学校の先生に指導をしてもらっていました。指導というよりは水遊びの延長なんです。授業の前にはしっかり幼稚園の先生と小学校の先生がいまの5歳児はこうですよとか、小学校、保育園等ではこんな水遊びをしていますよということをしつかり話し合いをされたうえで小学校での指導をされていました。子どもたちの小1ギャップというのがあるわけですが、学ぶということより雰囲気等の違いに戸惑う子が多いんだと思うんです。そのときは小学校のプールに入れてもらったことでやっぱりスケールの大きさですとか、水の深さの違い等で子どもたちも戸惑いを見せていました。しかし、その時は先生がたもハイテンションで子どもたちをほめたり、幼稚園の先生のように子どもたちとハイタッチしたりして幼稚園に近い雰囲気を醸し出そうとしているのがよくわかりました。幼稚園の子どもたちがなるべく小学校に入ったときに雰囲気のギャップを感じないような取組をしているとおっしゃっておられ、子どもたちの心が安心する工夫を感じました。

その地域では保幼小の連携をしっかりとっているということで、子どもたちにとって安心できる要素が増えているのだなと感じました。

藤田委員

委員のおっしゃった小1プロブレムはまさにその通りで、小学校に挙げる時には下駄箱への靴の入れ方等をしっかりと教える必要があるとのこと。そういった社会性を育てて送り出すにはどうしたらいいのかということ考えたときに、やはりまずそこがしっかりとないと学びの以前で躓いてしまう子が出てくると思います。幼小の接続が社会性を育むというところでしっかりとできると、幼から高への接続も何か見えてくるものがあるように思いました。

土井委員

一つはいま藤田委員おっしゃられたように、学校段階が上がっていくなかで、次の学校段階で何を学んでいくのかということを見越してもらおう。あるいは前の段階で何を学んできたのかということ踏まえたうえで教育をしていただくということが全体の見通しを立てるうえで非常に大切です。先ほど事務局の説明でもあった割り算の話にしても、数学はどんどん抽象度が高くなっていきます。そして、抽象度や操作性が高まっていくことについていけない子どもたちが出てくるわけです。したがって、そこを見通しながらやっていただくというのは非常に重要なことでもあります。

ただ、藤澤先生のおっしゃった点も私は正しい面があると思っております。学校段階が変わるということは環境が変わるということで、つまり、新しい世界に入っていくということなんです。新しい環境なので、不適合を起こす子も出てくるのですが、同時にそれは自分が伸びる時でもあります。いままでと違う世界の中に入っていくって、新しい人間関係を作って自分が伸びていくという時期でもあるわけですから、それをなくすような形で教育課程をつくと、おっしゃっていただいたように視野狭窄、つまり子どもたちが非常に狭い人間関係の中で生きてしまし、新しい世界に入っていくにくいということが起きてしまいます。次の世界で、子どもたちがより広い世界にステップを進めていけるようにしないといけません。幼稚園から大学までそういったギャップの経験をさせないように教育課程を組んでしまいますと、結局、社会に出るときに不適合が出てきてしまうのではないかと思います。

ます。ただそこまでに不適合を起こすこともあるので、それをサポートできるような連携は取っていただく必要があると思います。その辺バランスをどうとるかは今後県として検討すべきかと思います。

岡崎委員

先ほど藤澤先生が言われていたように、学ぶことが好きというところで、これはわが子のことですが、先生との関わり一つでスイッチが入ったという事がありました。そうすると全然違う自主学習や学びへの意識が変わりました。中学に行っても積極的に学習に向かってくれました。高校に行くと環境がまた変わって、スイッチが切れることもありました。しかしその中で大学へ進学するために自分で頑張ってスイッチを入れているところを見ていて、やっぱりベースは先生の言われた学ぶことであると思います。冒頭にありました地域のことや学園、学校のことを好きだと思える子どもを育てることが教育としては大切なのではないかと思います。

佐藤委員

そういうことを踏まえたうえで、以前ロータリークラブでお預かりしたデンマークの子が言っていたことで印象的だったことがあります。日本の子どもたちはみんな同じ制服を着て、数学で一生懸命計算をしていると。デンマークはすべてパソコンでやるので、なんでみんな同じ項目を覚えるんだろうと、そもそもそれがどうなっていくのか、何故こうなるのかというところをワークショップでやったり、意見交換であったりということデンマークではやっているということを知りました。日本はこのままではだめだよということ、かなり園児に言われました。これだけ生き方や考え方が変わってきて、学校の在り方や教育の在り方というものがどうなっていくんだろうという大きな事を考えていかないと、個性、特性、その多様性、といったところを大切にすることで、一つにまとまってしまうところにギャップが出てきているのかなと思いつつ今日の議論を聞いていました。

青木教育長

ありがとうございました。最後に知事よりお願いします。

三日月知事

私が個人的に気にしているのは、この事務局から説明のあった13ページの保幼から小学校への繋ぎのところ。そして特に幼小で言

いますと幼児期から右側緑色の小学校部分への移行と、左の幼児期における学びの芽生え期への対応についてです。ここが難しくもあり、楽しくもあり、多様化しています。そのあたりをどう統一できているのか、連携できているのか、質が担保できているのかというあたりはさらに深堀りしたいなと感じました。要するに、学びの芽生え段階からどのように学びの基礎段階につなげていくのかということです。もう一つは小学校から中学校段階への接続についてで、資料その下にありますように小学校と中学校で同じ問題であります但正答率が半分以下になり、無回答率が5倍くらいになっているという現状があります。ここをどう、小学校の先生と中学校の先生が連携して教えてあげられるのかということです。例えば、小学校の段階でもうすでに教科担任制のようなものを試行してみて、土井委員がおっしゃったように、より抽象的に数学を学ぶようなところに持っていけるのかどうなのかということも考える必要があると思います。あと最後は、中学校から高等学校のところで基本的に地域もバラバラになりますから、それぞれの進路選択の問題だとは思いますが、前から申し上げているように課題や強い個性のある子どもたちには地域をこえた繋がりが必要なのではないのでしょうか。ここは公私分け隔てなく考えていく必要があります、この3つの繋がりは県としてもしっかりと整えていく必要があるのではないかと思います。その意味では、近江兄弟社さんの苦悩の中での模索の御経験も折に触れてお聞かせいただきたいですし、守山中高での課題は今後顕在化してくるかもしれませんので、よく現場とコミュニケーションをしながら進めていきたいと思っています。

青木教育長

ありがとうございました。本日は時間もタイトな中となりましたが、学年間、教科間、校種間の繋がりについて御議論をいただきました。校種間の連携については、ある意味逆のことも起きていて、一貫することのよさと選択する必要性もあるということがありました。そこも子ども一人ひとりによって違うところなので、そこにどう対応していくのかということは非常に重要であると感じました。今後このようなことをどのように施策の中に盛り込んでいくのかというところは、我々事務局としてもしっかりと検討していきたいと思っています。これにて第2回滋賀県総合教育会議を閉会させていただきます。次回、第3回

は8月31日の開催を予定しております。本日はお疲れ様でした。